岸本佐知子『死ぬまでに行きたい海』

大塚真祐子

読みながら時空が歪むような感覚を覚えた。そんなはずはないのに、何もかもがまるで自分の目にした景色で、自分の訪れた場所で、自分の記憶のようだった。

記憶からなくなれば、場所も、出来事も、人もいなくなってしまう。
そんなはずはないと引き留めたくて、抗いたくて、一刻も早く記憶を言葉に結びつけないと、と追いたてられるように書きつづる著者の姿を想像するうちに、想像のなかの著者の目と、読む自分の目が完全に重なった瞬間があった。次の文章を読んだときだ。

〈この世に生きたすべての人の、言語化も記憶もされない、本人すら忘れてしまっているような些細な記憶。そういうものが、その人の退場とともに失われてしまうということが、私には苦しくて仕方がない。どこかの誰かがさっき食べたフライドポテトが美味しかったことも、道端で見た花をきれいだと思ったことも、ぜんぶ宇宙のどこかに保存されていてほしい。〉（「丹波篠山」88pより）

以前からわたしは、届かなかった手紙や、伝えなかった言葉が、寄せてはうちよせる波打ち際のような場所を、夜の闇のなかに想像していた。
イメージとしては星雲のような、端のない宇宙の端っこのような場所だ。
なぜ岸本さんがそのことを知っているのか、とわたしは勝手に訝しんだ。あれはわたしだけの場所だったはずなのに。

『死ぬまでに行きたい海』を読むまでは、いつもの岸本さんの、奇妙で切実でちょっと笑える軽みのあるエッセイを想像していた。

読み始めたら切実さはそのままに、入口も出口もまったく違っていてうろたえた。

そしてどうしようもなく惹きつけられた。
惹きつけられ、うたれたままのわたしは、まだ岸本さんの描いた町の地図の上をさまよっている。そして町をさまようわたしの姿が、いつかこの本のなかで岸本さんの言葉になってしまってもいいと思っている。そんなふうに思えた本ははじめてだ。